3 月 26 日のメッセージ

聖書：ルカによる福音書　20：　9 – 19

「隅の親石」

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」(ヨハネによる福音書 3:16)

クリスマスによく読まれる聖句です。何度も耳にしながら、ふと思うのです。神は本当に安心して、その独り子を世にくださったのだろうか、と。

出エジプトという大きな奇跡を目の当たりにしながら、神に従わなかった世を神は信頼なさったというのでしょうか(「主はモーセに仰せになった。『あなたがエジプトの国から導き上った民は堕落し、早くもわたしが命じた道からそれて、若い雄牛の鋳像を造り、それにひれ伏し、いけにえをささげて、「イスラエルよ、これこそあなたをエジプトの国から導き上った神々だ」と叫んでいる。』」出エジプト記 32:7-8)。人間ならばとてもできないような決断を、敢えて神はされました。

だからこそ、「その愛に応えていきたい」となるのが「正しい」応答なのはわかっています。神によって新しい自分に変えられて、神に従うのが「正しい」人間のあり方だと知っています。

ところが、頭ではわかっていながらも、つい「自分さえ良ければ」に再び陥るのもまた人間なのです(「彼女の民は皆、パンを求めて呻く。宝物を食べ物に換えて命をつなごうとする。『御覧ください、主よ／わたしのむさぼるさまを見てください。』」哀歌 1:11)。そして、その歴史は何度も、何度も繰り返されてきました。変わることを期待されながら、一向に神に立ち帰ろうとしない人間の姿を、私たちはどれほど見てきたことでしょう。

それでも、神はなお諦められません(「そこで、ぶどう園の主人は言った。『どうしようか。わたしの愛する息子を送ってみよう。この子ならたぶん敬ってくれるだろう。』」ルカによる福音書 20:13)。

そして、人間もまた変わることがありません(「農夫たちは息子を見て、互いに論じ合った。『これは跡取りだ。殺してしまおう。そうすれば、相続財産は我々のものになる。』」ルカによる福音書 20:14)。

それをわかっていながら、なおイエスは十字架への道を歩まれます(「主よ、わたしは自ら進んでいけにえをささげ／恵み深いあなたの御名に感謝します。」詩編 54:8)。神に信頼し、神に全てを委ねて、イエスは神の召しに応じられます(「同じようにキリストも、大祭司となる栄誉を御自分で得たのではなく、／『あなたはわたしの子、／わたしは今日、あなたを産んだ』と言われた方が、それをお与えになったのです。」ヘブライ人への手紙 5:5)。たとえ人間から棄てられたとしても、神は決して見捨てないことに信頼しておられるのです。

「家を建てる者の捨てた石、／これが隅の親石となった。」(ルカによる福音書 20:17)

人から棄てられ、十字架にかけられることになろうとも、神はその全てを無駄にされることはないとの確信が、イエスを前へと進ませます。

しかし、それは決して、イエス自身が強かったからではありません。むしろ、イエスは常に不安と闘われていました(「父よ、御心なら、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、御心のままに行ってください。」ルカによる福音書 22:42)。一人の人間としての弱さを知っておられました。悪魔の誘惑に敢えて答えられたように、人間の弱さととことんまで寄り添おうとされたのです(「大祭司は、自分自身も弱さを身にまとっているので、無知な人、迷っている人を思いやることができるのです。」ヘブライ人への手紙 5:2)。

そのようなイエスだからこそ、私たちは真の救い主として信頼できているのではないでしょうか。

私たちの、自分自身でも見たくない、弱くて小さい部分をもイエスは知り、見つめ、その上で私たちを赦し、救いへと招かれています。他者に誇ることなど何も無い私たちをも、隅の親石としてくださり、神の神殿を建て上げてくださるのです。